

マレーシアがもっと好きになる ライフスタイルマガジン

FREE

毎月5日発行

# senyum

[セニョ〜ム]

5 May 2011  
21号

特集

## ロイヤルセラランゴール ピューターの魅力

タウンガイド Bangsar 編

Safe to Eat Japanese Food

# ロイヤルセラランゴール

# ピューターの魅力



写真提供：ロイヤルセラランゴール

## 道具片手にマレーシアへ

19世紀後半、「ロイヤルセラランゴール」の創設者であるYong Koon (ヨン・クーン)は、11歳のときから当時、錫産業で栄える中国広東省の汕頭で、錫職人として修業を積んでいた。1885年、愛用の工具を手に、先にマレーシアへ来ていた、同じく錫職人である兄弟を頼りにKLへ渡る。KLの当時の人口は4054人。クランからKLに鉄道が敷かれ、錫産業が活気づいた時期であった。1898年、マレー半島の錫生産は年間4万トン、世界一を誇るまで発展していた。(主な産地としてKLに加え、ペラ州、ネグリシンピラン州、マラッカ州などがあげられる)。そんななか、ヨン兄弟はシラン通りに「玉和 (Ngok Hon)」を設立、亜鉛メッキ製のバケツや雨どいなどを製造する傍ら、錫製のお香立てや燭台、華僑探鉱者に向けた神仏具の製造も始めた。当時の製品には「玉和足錫」という印が刻まれているが、これが後の「ロイヤルセラランゴールピューター」へと発展していくことになる。



ヨン・クーン (1920)



ロー・パット (1911)



(左) Cross Street (現 Jalan Silang) の店前。(1911)

## 新たな出発

1938年にSoh Eng (ソー・エン)と見合い結婚したベン・カイ。戦後は4人の子どもを抱えて仕事に明け暮れた。母が残したブドウの工場でピューター製の花瓶、ポット、灰皿などを、新たにバトゥ通り(現Tanjung Abdul Rahman 通り)に借りた店舗で販売。接客、掃除、簿記から配達まですべてを妻ソー・エンがこなした。子供と一緒に店の裏にある大きな木製の机を囲んで宿題を済ませると、子ども達も店に出て、母の仕事を手伝った。社会的に働き者のソー・エン、寡黙で仕事熱心なベン・カイの二人三脚はブドウの工場を大きく発展させた。

以前の「Malayan Pewter」では、中国古来の製法で生産し効率が悪かったことから、ベン・カイは新たな技術を導入し、できる限りの機械化を図った。また、彼は1960年代に多くの女性工員を雇用していたことでも知られるが、緻密な作業は女性向きであること、また、当時女性の職はメイドか裁縫師しかなかったことから、多くの女性が「Selangor Pewter」で働くことになった。(これは現在も変わらず、ビジターセンター内の職人のほとんどが女性である。)

## 「ロイヤルセラランゴールピューター」

1962年、ベン・カイは政府の助成なども受け、Selapakにある4千sfの敷地へ工場を移転させた。新しい工場は作業員らの働き心地を重視して設計された。ベン・カイ夫妻は従業員たちを家族のように大切にしていた。従業員は親愛の意を込めて彼らを「アンティ、アンクル」と呼んでいた。1980年にベン・カイは子ども達に事業を譲り引退するも、病に臥すまで会社へ度々足を運んで



ベン・カイとソーエンを囲んだ家族写真 (1957)

今から百年以上も前のこと。中国から一人の若き錫職人が、手持ちの工具数点を手にマレーシアに渡ってきた。小さな家族からスタートした小さな工場はやがて一大企業へと発展。代々受け継がれる華僑ファミリービジネスのなかでも大きな成長と成功を収めた一家族の歴史、「ロイヤルセラランゴール」の魅力をご紹介しよう。

## 幸運の女神

当時の華僑がそうであったように、ヨン・クーンも中国に一時帰国して結婚したが、妻Loi Pat (ロー・パット)を残してKLへ戻った。初めて長男と対面したのは、なんと7年後のことだったという。その後妻を連れてKLへ。さらに3人の男の子が生まれ、家族は「玉和」のショップハウスの2階に住むことになる。三男Peng Ka (ベン・カイ) 2代目は、当時を振り返って「錫屑にまみれて産まれ育った」と話している。さて、ヨン・クーンのビジネスを成功に導いたのが妻ロー・パットといえるだろう。当時、錫と同様に盛んだったゴム産業に目をつけた彼女は、ゴム樹液を採取するための道具として亜鉛製の容器を大量に生産し、それを各プランテーションに売りさばっていた。そのお金で金の指輪をたくさん買い、紐に通して腰に巻き、服の裏に隠してヘソクリを貯めたのだ。ヨン・クーンにはちょっとした飲み癖と競馬好きの傾向があったことを危惧していたことだろう。1930年、ロー・パットの貯金でブドウ通りにショップハウスを購入。お屋敷とはいえないくとも、当時流行りの洋風窓が付いた持ち家だ。25歳になる長男Peng Pow (ベン・ポー)はそこに「Malayan

## 家族不和と第二次世界大戦

1938年、四兄弟の間で起こった小さな衝突が原因で、長男ベン・ポーは「Malayan Pewter」とともに、ブドウのショップハウスを去った。残った3兄弟は1940年



いたという。1990年、享年75歳であった。また、彼の生涯のパートナーであり、右腕でもあった妻ソー・エンは引退後、忙しい子ども達に代わって孫の世話に、趣味にと忙しいながらも充実した時を過ごしたという。1995年死去。享年78歳であった。1992年、マレーシア国王より「ロイヤル」の称号を授かり、「Selangor Pewter」は「Royal Selangor」と改名された。現在も確固たるブランドを築きあげており、ベン・カイとソー・エンが残した4人の子ども達が代表を務めている。



ブドウ通りの工場で作業する女性職人とベン・カイ (1960)

## 『The Royal Selangor Story』 Chen May Yee

『Asian Wall Street Journal』、『Agence France-Presse』のリポーター。ヨン・クーンのひ孫、ダティン・チェンの長女。曾祖父から母の代まで、大きな成長を遂げた「ロイヤルセラランゴール」のファミリービジネスの基軸を克明に綴った本書は、単なる家族の歴史だけではなく、マレーシアの古き良き時代の生活を身近に知ることができる。





## ロイヤルセランゴールのビジターセンターツアー

吹き抜けのロビー。ここからビジターセンターのツアーが始まる。今回は日本語が堪能なツアーガイド、ラジさんが館内を案内してくれた。受付カウンターから真っ直ぐ伸びるエスカレーターで1Fにあがる(①)。館内入り口には、ロイヤルセランゴールの歴史を追ったパネルが並ぶ。右手の歴史資料館では、歴代のピューター製品(②③)、幻の「メロンポット」(④)、錫採取の道具やピューターを作るための道具などが展示されている。19世紀後半の風景写真を背景に衣装を身にまといパチリと記念撮影、なんてコーナーもあり(⑤)。続いては体感学習。ピューターは錫を主原料とした合金で、強度や光沢を出すために、アンチモンと銅が混ぜられている。ピューター 250kgが天秤に乗せられ、反対側の天秤皿に何人かのりと傾く巨大天秤では「重さ」を体験(⑥⑦)。また、ピューターの質や素材、大きさの違いが奏でる、プリキ音から透き通るような音までを聴覚で実感することができる(⑧)。

モダンかつ洗練されたギャラリーから(⑨)、雰囲気

も変わり工場へと入る(⑩)。まずはウェルカムドリンクで良質のピューターの特徴を実感。ピューター製のコップが手渡される。どしりと重い(⑪)。そこに、冷たいソフトドリンクが注がれて驚かない人はいない! あっという間にコップが冷たくなるのである。奥へ進み熟練の女性職人が手際よくピアマグを製造する作業を間近に見学。錫は低融点で溶けるので作業やデザインがしやすい素材なのだそう。溶かした錫を型にいれて瞬時に出す。こうすると、中に空洞ができるので、重いピューターを少しでも軽く仕上げることができる(⑫)。形ができたら、周りを削る。これもすべて手作業。削りカスは、また溶かして原料に戻すことができるのも、ピューターならではの利点。浮き彫りされたデザインを克明にするため、さらに細かな研磨作業(⑬⑭)。20年以上の経験をもつ職人によるすべてが手作業だ。全工程1時間弱のツアーだが、無料でここまで見せてくれる施設はマレーシアでもここだけではないだろうか。(撮影: Dennis Yap)



## たゆまぬ努力と情熱がファミリービジネスを支える

# ダティン・Chen Mun Kuen さん

ロイヤルセランゴールは個人商店からスタート、世界でも最大規模のピューター工場をもつ一大企業に成長したが、今でもファミリービジネスのスタイルを崩さない。一般には知られていない、Yong ファミリーの素顔(魅力)を覗く。



ダティン・Chen Mun Kuen: 1942年生まれ。ロイヤルセランゴール取締役。ベン・カイの孫娘。ヨン・クーンの3男で、2代目である父ベン・カイの代でロイヤルセランゴールは飛躍的な成長を遂げる。兄のポー・シンはシンガポールの代表をしていたが引退。現在は弟のポー・ゴンが代表を務める。姉のムン・ハはオーストラリア在住。

約束の午後2時より10分も早く現れたダティン・チェン、現在68歳。小柄だがピンと張った背筋と引き締まった体にチヨンサムがとてよく似合う。――ヨンファミリーのいちばんの思い出話を聞かせてください。(手にもっていた茶ポットを見せながら)この「メロンポット」です。これはレブリカですが、シヨールームにはオリジナルの「メロンポット」が展示されています。これは祖父がデザインしたもので、12枚のピューターシートをつなぎ合わせて仕上げたポットです。話をお聞きになりたいですか? 第二次大戦中、カジャンの貧しい村でのごと、村人たちは(マレー半島を北から南進する日本軍を阻止するため、イギリス軍が投下する)爆撃の雨をかくぐりながらも、倉庫に眠っている米や砂糖を持って逃げようとしていたんですね。そのとき、「メロンポット」に目をやるAh Hanという名の一人の若者がいました。ポットを拾い上げようと、腰をかがめた、その瞬間、すごい銃音が彼の頭上を通り過ぎていきました。彼は「命を救ったラッキーポット」を持ち帰り、何十年にも渡り、大切に保管していました。時を経て、1970年代初期、Ah Hanはその「ラッキーポット」をポリッシュに出せようと、ピューター工場へ持っていきました。磨いた後にポットの裏から浮かび上がった刻印が、ヨン・クーンの印「玉和足錫」。つまり、そのラッキーポットは祖父が作った「メロンポット」だったのです。

――「The Royal Selangor Story」によると、お父さまの代でも当初は家内工場の要素が強かったようですが、家族皆で工場を支えていたという感じでしたか? そうですね。学校へ行っていないときは、ずっと家業を手伝っていましたよ。遊んでいる同級生たちをうらやましいとは思いませんでした。朝から夜遅くまで一生懸命働く父や母の手伝いをするのが、当然だと思っていましたから。最初は一店舗丸々借りるお金もなかったのですが、店舗の半分を借りて、そこが工場と住まい。当時のパトウ通りですね。その後ブドウ通り

へ移りましたけれど。――「家訓」、ご両親から絶えず言われた言葉はありますか? 「けんかはしない。兄妹一緒に仲良くやりなさい」ということかしら。――セランゴールピューターからロイヤルセランゴールへと社名が変わっていますが、今から30年以上も前の話になりますが、当時のセランゴール州スラングौरがオーストラリアのパスにあるデパートへ行ったときのこと。店員に「どこから来たのか」と尋ねられ、「セランゴールから」と答えたところ、「セランゴールピューターから来たのね」と言われたのだそうです。「セランゴール州」でもなく、「セランゴールスラングौर」でもなく、オーストラリアで「セランゴールピューター」という名前がすでに知れ渡っていることに感銘を受けられたのだそうです。以降、当社の製品はセランゴール州王室ご用達となり、92年には「ロイヤルセランゴール」と社名を正式に変えることになりました。

――創業者であるおじいさまの記憶はありますか? 祖父は私が10歳のときに亡くなりました。祖父は客家語しかしゃべれない、私は広東語は

できませんでした。――最後にロイヤルセランゴールが成長した理由は何だと思われませんか? 「グッドデザイン」と「グッドワークマンシップ」を心がけています。デザインも常にアップデートした新しいものを取り入れています。



(上) 勤続5年以上の写真の手形が飾られるピューターセンター

――最後にロイヤルセランゴールが成長した理由は何だと思われませんか? 「グッドデザイン」と「グッドワークマンシップ」を心がけています。デザインも常にアップデートした新しいものを取り入れています。

――最後にロイヤルセランゴールが成長した理由は何だと思われませんか? 「グッドデザイン」と「グッドワークマンシップ」を心がけています。デザインも常にアップデートした新しいものを取り入れています。

## ロイヤルセランゴールのピアマグが最高!



日本からやってきた父をビジターセンターに案内した。ウェルカムドリンクを口にした瞬間、「ピアマグ買って帰ろう!」と言。錫には水質浄化作用があることから、ビールの味わいを滑らかにしたり、独特の匂いを和らげる効果があるのだそう。さらに、キンキンに冷えたビールを注ぐと、ピアマグは瞬時に冷えその温度を

保ち泡もきめ細やかになる。また、錫から空気への熱伝達率が低いので、保温効果はもちろん、水滴が付きにくいのもピューター製ピアマグの特徴といえる。発泡酒までもが、ピューターピアマグに注ぐとビール並みの美味しさにも関わらず、ちょっと高価ではあるが試してみたい逸品である。

### ロイヤルセランゴール直売店

国内外に多数の直営店を持つ同店。なかでもビジターセンターの品揃えは豊富。毎年定期的にニューコレクションを発表するほか、オリジナルや映画コレクションなどの限定品も随時あり。カスタムメイドや記念品などの注文販売も受け付けている。



### Selberan Jewellery

1972年、事業拡大の一環で設立されたジュエリーショップ。マレーシアで初のヨーロッパ技術とデザインを採用。18kゴールドや宝石をあしらった美しいジュエリーは品質はもちろん、デザインの美しさで数々のデザイン賞を受賞している。

### Comyns

1993年以降、ロイヤルセランゴールの傘下となったシルバーウェアを製造するブランド。その歴史は1645年のイギリスにさかのぼる。多くの銀細工師たちの優れた作品で定評を博している。アンティーク製品など、製造年がわかれば、当時の製品を再現することも可能。



### the Café

スタイリッシュなカフェではサンドウィッチなどの軽食や日替わりローカルフードが人気。ショーケースに並ぶケーキは一族のオリジナルレシピからなるホームメイド。おいしいコーヒーにバーストリーでほっと一息。

### みどころ



### ギネス登録された世界一大きなピアマグ

1985年、ロイヤルセランゴール100周年を記念して作られた巨大ピアマグ。600人以上の職人のなかから選ばれた6名の職人による作品。型の作成から研磨、取っ手のハンダ付けまで2000時間。総重量1557kg。高さ1987mm。底直径1693mm。内容量2796L。

### ピアマグ製ツインタワー

ビジターセンターの中央吹き抜けに堂々たる姿を現すツインタワー。7062個のピューター製ピアマグで築かれ、全長9.1メートル。高さもさることながら、その贅沢さに圧倒される。GFでは裾部分が、1Fではてっぺんの細部を確認できる。

### デモン



### School of Hard Knocks

薄いピューターの円盤に、まずは自分の名前を刻もう。判子を金槌でトントントン。次に、型に沿ってトントントン。かなり力を入れた作業。細部をトントントン調整して、小さな手作りの風合いがかわいいういぶわうのできあがり。参加費RM50。修了証とエプロンももらえる! 要予約。



### ロイヤルセランゴール・ビジターセンター

4 Jalan Usahawan 6, Setapak Jaya 53000 KL  
03-4145 6122  
visitorcentre.royalselangor.com